

みなと市議会議員選挙 選挙区攻略ブリーフィング

過去の全選挙データに見る、この選挙区の戦い方

本レポートは、この選挙区で行われた過去の選挙結果を横断的に分析し、「戦場としての性質」を記述的に整理した保存版資料です。特定候補の当落予想や特定の戦術の提示は行いません。

- 過去2回・全候補の完全データ
- 当選ライン・競争率・投票率のレンジ分析と3段階目標
- 全国データとの比較・地域条件・目標票数ワークシート



分析レポート作成日

2026年07月06日

機密情報・関係者限り

外部配布厳禁



選挙情報局

公正・中立・客観の立場から、信頼できるデータと分析を提供します。

目次

01	本レポートについて	2	22	直近回の全候補データ	14
02	本レポートの読み方（方法論）	2	23	直近回の統計分析	16
03	エグゼクティブサマリー	3	24	勝ちパターンの分解	16
04	選挙区の基本情報	4	25	全国の中でのこの選挙区	17
05	過去の選挙結果	4	26	地域データ①：財政の条件	17
06	投票率の推移	5	27	地域データ②：人口の将来	18
07	当選ラインの推移	6	28	政党の地力	18
08	競争率・候補者数の推移	7	29	年代別投票率	19
09	レンジ分析①：当選ライン	7	30	有権者の関心が高い争点	19
10	当選ラインの分解	8	31	重点アプローチ層の整理	20
11	レンジ分析②：競争率・投票率	9	32	選挙準備の標準タイムライン	20
12	投票率と当選ラインの連動	9	33	目標票数ワークシート	21
13	無投票の歴史とリスク	10	34	行動枠：目標を月次に落とす	21
14	選挙区の力学	10	35	章別サマリー	22
15	全国前例が示す再挑戦の相場	11	36	この選挙区・早わかりQ&A	23
16	世代交代の動き	11	37	相場の総括ダッシュボード	23
17	女性候補・当選の推移	12	38	次の一手につながる確認論点	24
18	党派構成の推移	12	39	用語解説	24
19	各回スナップショット	13	40	データの限界と正しい使い方	25
20	2022年の詳細レビュー	13	41	まとめ	25
21	2026年の詳細レビュー	14			

お急ぎの場合は 02 エグゼクティブサマリー と 目標票数ワークシート だけでも実務に使えます。

01 本レポートについて

はじめにお読みください

本レポートは、**みなと市議会議員選挙**（サンプル県みなと市）という選挙区を「戦場」として徹底的に記述した保存版資料です。収録した過去2回分の選挙結果に加え、全国の市議選データとの比較、地域の人口・財政条件、政党の地力までを1冊に集約しました。**特定候補の当落予想や特定の戦術の提示は行いません**。提供するの、意思決定の土台となる「この選挙区で過去に実際に起きたこと」の徹底的な整理です。

レポートは4部で構成されます。**第1部（02～05章）**は選挙区の全体像と過去の結果。**第2部（06～14章）**は当選ライン・競争率・投票率・世代・党派など指標別の時系列分析。**第3部（各回レビュー～全国比較）**は過去の各選挙の個別レビューと全国分布の中での位置づけ。**第4部（地域データ～巻末）**は人口・財政・争点など地域条件と、目標設定のワークシートです。

情報の3層構造（本レポートの品質方針）

第1層：自動・確定	選挙結果の数値。公開データから機械的に導出し、手を加えていません。
第2層：外部統計	人口・財政・国政得票。公的統計から取り込みます（未配置の場合はSAMPLE表記の仮データ）。
第3層：人の検証	争点・地域課題。受注時に人間による調査・検証を経て差し替えます（SAMPLE表記）。

本資料は依頼者本人（または正当な権限を有する陣営関係者）の利用に限定した機密資料です。無断転載・複製・第三者への配布を禁じます。SAMPLE表記のある章は、受注時に実データへ差し替えのうえ正式納品します。

この3層構造は、有料資料に「それらしい推測」を混ぜないための品質保証の仕組みです。本レポートで数値として断定するのは第1層（この選挙区の過去2回の実測）と、その全国分布との統計比較（第2層）に限り、地域固有の質的記述（第3層）はSAMPLE枠として明示的に分離しています。各数字の出所を常に確認できる状態を保つことが、販売物としての信頼性の核心です。

読み方の指針は3つです。第一に、単一回の結果は「点」にすぎないため、必ず複数回の推移（線）で読むこと。第二に、この選挙区の数値を全国分布の中に置いて相対化すること（各章の全国比較）。第三に、各章末の解説と巻末の確認論点を、陣営内の検討アジェンダとして使うことです。数字の羅列で終わらず、『この数字は何を意味し、次に何を検討すべきか』まで一貫して示すのが編集方針です。

02 本レポートの読み方（方法論）

指標の作り方と、誤読を避けるための約束

本レポートの数値は、この選挙区の過去2回・全候補・全得票という第1層データを、定義済みの指標（当選ライン・競争率・投票率・再選率など。巻末の用語解説参照）に機械的に変換して得ています。推測や重み付けは一切加えていません。だからこそ、同じ元データからは誰が計算しても同じ数字が出る——この再現性が、感想ベースの分析にはない本レポートの土台です。

本レポートが採る3つの基本姿勢

点でなく線で読む	1回の選挙結果は特殊条件に左右される「点」。複数回を並べた推移（線）で相場を捉えます。
予想でなくレンジで示す	将来を1点で当てにいかず、過去実測の最小～中央値～最大の「幅」で目標を設計します。
絶対値でなく相対位置で測る	この選挙区の数値を全国同種選挙の分布に置き、上位何%かで相対化します。

レンジ（幅）で考える利点は、意思決定の頑健さにあります。たとえば当選ラインを『次回は○票』と1点で予想すると、その前提が外れた瞬間に計画全体が崩れます。これに対し『過去実測の中央値を第一目標、最大値を確実圏』と幅で置けば、投票率や候補者数がどう転んでも、目標は依然として意味を持ちます。

08～09章のレンジ分析はこの姿勢の中核です。

相対位置（全国分布の中で上位何%か）を重視するのは、票の絶対数だけでは選挙区の規模差を吸収できないためです。同じ当選ライン2,369票でも、有権者数が違えば「議席の値段」の重みは変わります。

読むときの注意：本レポートは「誰が勝つか」には一切答えません。当落予想は行政書士等の専門領域であり、本レポートが提供するの意思決定の土台となる事実整理と全国比較に限られます。各章の数字は、答えではなく『精度の高い問い』を立てるための材料としてお使いください。

03 エグゼクティブサマリー

この選挙区の結論——1ページで全体像を

- 直近（2026年）の当選ラインは **2,369票**（定数26・立候補32人・競争率1.23倍）。
- 過去の当選ラインのレンジは **2,369～2,466票**（中央値2,417票）。目標設定はこの幅で行うのが実務的。
- 投票率は直近 **52.3%**・過去中央値 53.7%（低下傾向）。±3ptの振れで当選ラインは大きく動く。
- この選挙区の**現職再選率は 100%**（n=26）。
- 直近の当選ライン水準は、全国の市議選の中で**上位50%**——この数字が「参入の壁の高さ」を表す。

この選挙区の性格

地盤型（現職優位）

現職再選率100.0%・競争率1.23倍・無投票0回という過去データからの機械的分類です。地盤型なら「時間をかけた面の浸透」、流動型なら「タイミングと差別化」の比重が上がります。

数字で見る勝負どころ

目標の目安	中央値 2,417票／確実圏 2,466票
票の変動要因	投票率±3pt・候補者数の増減
時間軸	次回想定 2030年前後

以降の章は、このサマリーの各行に根拠を与えるものです。時間のない場合は、08章（当選ラインのレンジと3段階目標）と、巻末の目標票数ワークシートだけでも実務に使えます。

この選挙区の性格を「地盤型（現職優位）」と分類したのは、現職再選率100.0%という1つの実測値が根拠です。全国的に地方選の現職再選率は8割前後が目安とされ、これを大きく上回れば新規参入は現職の引退・世代交代待ちが定石、下回れば挑戦にも合理性が生まれます。この分類は戦術の指示ではなく、資源配分の重心をどこに置くかの見取り図です。

このサマリーの使い方：目標票数は中央値2,417票を第一目標に、投票率±3ptの振れ幅を織り込んで設定してください。各行の根拠は以降の該当章で1つずつ検証します。

04 選挙区の基本情報

対象とデータカバレッジ

対象選挙区	みなと市議会議員選挙（サンプル県みなと市）
種別	市議
収録データ	過去 2回分 （2022年～2026年）の全候補者・全得票
直近の選挙	2026年（投票日 2026-04-21）
直近の定数/立候補	26 / 32人（競争率 1.23倍）
直近の投票率	52.3%（全国市議選の中央値 一）
直近の当選ライン	2,369票

本レポートの土台は、この選挙区で過去に行われた2回の選挙の完全な結果データです。1回の結果は「点」にすぎませんが、複数回を並べると、当選ラインの相場・票の動き方・顔ぶれの入れ替わりという「線と面」が見えてきます。以降の章では、この時系列こそを主役として扱います。

なお、選挙区の区割り・定数は改定されることがあります。過去データを読む際は、定数の増減（各回レビュー章に記載）を必ず併せてご確認ください。定数が変わると当選ラインの意味も変わります。

直近の投票率52.3%を全国市議選の中央値（一・n=2）と比べると、この選挙区の有権者の関心水準の相対位置が読めます。中央値より高ければ浮動票が動きやすく空中戦の効果が相対的に大きい、低ければ固定票の比重が高く地上戦が効く——という具合に、1つの分母（投票率）が戦い方の重心を示唆します。

収録した2回という母数は、相場を読むうえでの信頼性の目安になります。回数が多いほど、1回の特殊事情（天候・同日選挙・突発的な争点）に引っ張られない安定した相場が描け、少ないほど幅（レンジ）で慎重に受け止める必要があります。本レポートが点予想を避けレンジで示すのは、この母数の限界を正直に扱うためでもあります。

確認ポイント：次回選挙の想定時期・定数改定の有無・選挙区割りの変更は、選挙管理委員会の告示情報で最新を確認してください。本レポートの数値は作成日時点の収録データに基づきます。

05 過去の選挙結果

この選挙区で実際に起きたこと（全収録回）

過去の選挙結果（全回一覧）

年	投票率	定数	立候補	競争率	当選ライン	トップ得票
2022	55.1%	26	32	1.23倍	2,466	5,200
2026	52.3%	26	32	1.23倍	2,369	5,140

読み方：この表が本レポート全体の原典です。以降の全ての分析はこの表の数値の分解・比較・可視化です。レンジ（幅）に注目してください。最大と最小の差が大きい指標ほど、次回の不確実性が高い項目です。

表を読む順序は「右から左」をお勧めします。まず当選ライン（いくらで勝てたか）、次に競争率（どれだけ混んでいたか）、最後に投票率（分母がどれだけ動いたか）。この3つの連動を把握すれば、この選挙区の力学の8割は説明できます。

当選ラインの最大値（2,466票）を記録した回と最小値（2,369票）の回で何が違ったのか——競争率・投票率の列を見比べると、この選挙区で当選ラインを押し上げる主因が見えてきます。

収録した2回のうち選挙戦が成立したのは2回です。この母数がそのまま、以降のレンジ分析・当選ライン推移の信頼性の土台になります。回数が多いほど相場は安定して読め、少ないほど1回の特殊事情に引っ張られやすい——という前提で、各章の数値は幅（レンジ）で受け止めてください。

この表の使い方：気になった年の行を起点に、後段の『各回の詳細レビュー』章で得票上位・当落ボーダー・票の集中度まで掘り下げられます。一覧表で全体の傾向を掴み、詳細レビューで個別の回を精査する——この2段構えが読み方の基本です。

06 投票率の推移

選挙の「分母」はどう動いてきたか



読み方：投票率は選挙の「分母」です。低下トレンドの選挙区では組織票・固定票の比重が年々高まり、上昇局面では浮動票が勝敗を左右します。折れ線の傾きが、この選挙区の戦い方の変化を示します。

この選挙区の投票率は52.3%～55.1%のレンジで推移し、直近は52.3%です。全国の市議選の中央値（一）と比べると**低い水準**にあり、投票に行く層が固定化している可能性が高い選挙区です。

実務上は「±3ポイント」の感度で考えることを推奨します。有権者3万人の選挙区で投票率が3pt動くとは約900票が市場に出入りする計算になり、これは多くの地方選で当落1～2人分に相当します。

投票率のレンジ幅（2.8pt）そのものが、この選挙区の「分母の不安定さ」の指標です。幅が大きいほど回によって参加者が入れ替わり、当選ラインの読みが難しくなります。レンジ分析（08～09章）で楽観・中位・悲観の3シナリオを用意しておくと、選挙戦中盤の軌道修正が速くなります。

次に検討すべき問い：直近の投票率52.3%が全国中央値（一）に対してどの位置かを起点に、次回は同日選挙の有無・主要争点の有無で±3～5ptのどちらに振れそうかを見立ててください。この見立てが、当選ライン（06・08章）の上振れ・下振れ想定に直結します。

07 当選ラインの推移

「最後の1議席」の値段はどう動いてきたか



読み方：「最後の1議席がいくらだったか」の推移です。このラインを常に上回る得票力を作ることが、選挙区攻略の最終目標になります。下降トレンドなら参入障壁は下がっています。

当選ラインは2022年の2,466票から直近の2,369票へ、通算で**-97票**動きました。ラインの低下は、投票率の低下や候補者数の減少により「少ない票で議席に届く」ようになったことを意味します。新規参入にとっては追い風ですが、同時に既存の議席保持者の得票も目減りしている点に注意が必要です。

当選ラインは「結果として決まる」数字であり、直接コントロールできません。だからこそ、08章のレンジ分析で「どの水準なら何回中何回勝てたか」という確率的な目標設定が重要になります。

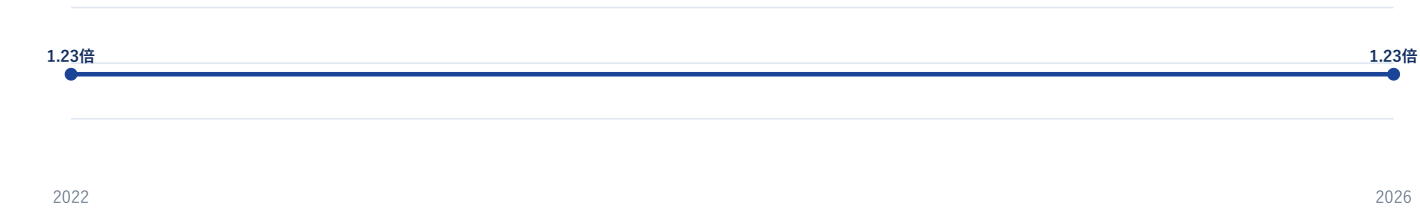
当選ラインの通算変化（-97票）を回数で均すと1回あたり約-97票のペースです。1回ごとの上下には投票率や候補者数の一時的な事情が混ざるため、複数回の平均トレンドの方が「参入障壁の構造的な変化」を安定して映します。目標設定は直近1回の値ではなく、このトレンドとレンジの両方で行ってください。

次に検討すべき問い：直近の当選ライン2,369票が過去レンジのどこにあるかを起点に、次回はトレンド（1回あたり約-97票）が続くと見るか反転すると見るかを、投票率・候補者数の見通し（05・07章）と突き合わせて判断してください。

08 競争率・候補者数の推移

この戦場は混んでいるのか、空いているのか

競争率（立候補 ÷ 定数）の推移



立候補者数の推移（人）



読み方：競争率1.0倍は無投票の瀬戸際です。1.0～1.2倍の低競争が続く選挙区は、1人の新規参入で構図が激変します。逆に1.5倍超では、票の分散により「固定票を持つ者が勝つ」構造が強まります。

直近の競争率1.23倍は、この選挙区の過去レンジ（1.23～1.23倍）の中で低い側にあります。立候補の意思決定は他候補も同じ材料（なり手不足・議員報酬・改選期）で行うため、競争率の予想は「前回並み」を基準に、引退・世代交代の情報で補正するのが実務的です。

2本の折れ線は連動します。定数がほぼ一定なら、立候補者数の増減がそのまま競争率を動かします。候補者数の折れ線が右肩下がりなら「なり手不足」の進行、上昇なら「議席への関心の高まり」を示し、次回が選挙戦になるか無投票になるかの先行指標として観察できます。

次に検討すべき問い：直近の競争率1.23倍が過去レンジのどこかを起点に、次回は引退・世代交代で候補者が増えそうか減りそうかを地元情報で補正してください。競争率が上がれば票は分散して固定票の価値が上がり、下がれば新規参入の余地が広がる——という前提で、狙い方の重心が決まります。

09 レンジ分析①：当選ライン

何票あれば勝てるのか——過去実績の幅で答える



読み方：過去の当選ラインの実測幅です。将来を1点で予想する代わりに、この幅のどこを狙うかで目標を設計します。

3段階の目標設定（過去2回の実績ベース）

目標水準	票数	意味
最低ライン	2,369票	過去いずれかの回なら当選できた水準。ここ未満は全回で落選圏
標準目標	2,417票	過去の半分の回で当選できた水準（中央値）。現実的な第一目標
確実圏	2,466票	過去のどの回でも当選できた水準。ここを超えれば構造変動にも耐える

目標は「2,417票を確実に、2,466票を視野に」という2段構えを推奨します。最低ライン（2,369票）を目標にするのは、その回の特殊条件（低投票率・少数候補）が再現される前提の賭けになるため、計画の基準としては危険です。

この3つの数字は、そのまま後援会・支援組織との共通言語になります。「何票必要か」の認識が陣営内で揃っていないことが、活動配分の迷走の最大の原因だからです。巻末のワークシートと併用してください。

レンジの幅（97票＝確実圏と最低ラインの差）は、この選挙区の「相場の振れ幅」です。幅が広いほど回による条件差が大きく、確実圏を狙う保守的な設計の価値が高まります。幅が狭ければ相場が安定しており、中央値目標でも十分に計画が立てられます。

この章の使い方：標準目標を2,417票、確実圏を2,466票として陣営の公式目標に据えてください。以降の全ての活動量は、この目標票数から逆算します（巻末の目標票数ワークシート・行動枠の章）。目標が票数で共有されているかどうか、計画的な選挙と場当たりの選挙を分ける最大の分岐点です。

10 当選ラインの分解

「最後の1議席」と「トップ」の距離から読む票の集中度

年	当選ライン	トップ得票	トップ/ライン比
2022	2,466	5,200	2.11倍
2026	2,369	5,140	2.17倍

読み方：トップ得票を当選ラインで割った比です。値が大きいほど上位に票が集中し（＝一部の強い候補が突出）、1.0に近いほど票が横並びに分布した回です。この比の推移が、選挙区の「票の集中の癖」を映します。

収録した選挙戦2回の平均で、トップは当選ラインの**2.14倍**の票を集めています。2倍前後以上なら、知名度・組織を持つ少数への集中が常態化した選挙区で、新規参入は『トップ争い』より『当選ラインの確実な突破』に照準を絞るのが現実的です。

当選ラインは『トップの票数』とは独立に動きます。トップが突出しても、下位の当落ラインが低ければ参入の壁はさほど高くありません。逆にトップと当選ラインが近い（比が小さい）回は、全体に票が行き渡った激戦で、わずかな差で順位が入れ替わります。目標設定では、トップの数字に惑わされず当選ライン（08章のレンジ）だけを基準にしてください。

11 レンジ分析②：競争率・投票率

当選ラインを動かす2大変数の幅

競争率のレンジ



投票率のレンジ



読み方：競争率と投票率は当選ラインを動かす2大変数です。次回の条件をこの幅の中で3通り（楽観・中位・悲観）想定しておくで、選挙戦中盤の軌道修正が速くなります。

2つのレンジの組み合わせで「最悪シナリオ」を定義できます。この選挙区の場合、競争率が最大値（1.23倍）かつ投票率が最大値（55.1%）で戦う状況が、必要票数が最も高くなる想定です。目標の「確実圏」はこのシナリオへの備えを意味します。

なお投票率は天候・同日選挙（国政と同日か）・争点の有無で数ポイント動くことが知られています。告示前に同日選挙の有無を確認することは、投票率シナリオの精度に直結します。

2大変数は独立ではありません。投票率が上がると新規の浮動票が入り、競争率も上がりやすい——という順相関が地方選ではしばしば観察されます。両レンジの最大値が同時に来る局面を「最悪」、両最小値が来る局面を「最良」として、必要票数の上下限を事前に握っておくのが実務です。

12 投票率と当選ラインの連動

分母が動くと「合格点」はどう動いたか——回別の対応

年	投票率	立候補	当選ライン
2022	55.1%	32	2,466
2026	52.3%	32	2,369

読み方：投票率（分母）・候補者数（分散）・当選ライン（合格点）を回ごとに並べた対応表です。投票率が高い回ほど当選ラインが上がるとの傾向があれば、この選挙区の合格点は「参加者の数」に強く依存します。

投票率が最も高かった2022年（55.1%）の当選ラインは2,466票、最も低かった2026年（52.3%）は2,369票でした。この2点を見比べると、投票率が動いたときに合格点がどちらへ・どれだけ動くかの実感がつかめます。次回の投票率シナリオ（09章のレンジ）を、そのまま当選ラインの見積もりに翻訳する材料になります。

投票率が上がると当選ラインも上がるのは、分母（投票総数）が増えれば各候補の得票も底上げされるためです。つまり『投票率が高い＝勝ちやすい』ではなく、『高い分だけ合格点も上がる』のが実像です。重要なのは絶対票数ではなく、その回の当選ライン（合格点）に対してどれだけ上回れるか——だからこそ本レポートは目標を票数の絶対値ではなく当選ラインとの距離で管理することを勧めます。

13 無投票の歴史とリスク

選挙戦が「起きない」ことも、この選挙区の重要な性質

年	実施	定数	立候補
2022	選挙戦	26	32
2026	選挙戦	26	32

この選挙区の無投票率

0/2回

収録全回のうち

全国の市議選の無投票率

0.0%

reported+無投票に占める割合

この選挙区では収録2回のうち0回が無投票でした。無投票の実績はなく、毎回選挙戦が成立している選挙区です。競争が常態化しているため、相場データ（当選ラインのレンジ）の信頼性は高いといえます。

無投票リスクの観察指標は3つ：(1)現職の年齢構成（世代交代期の接近）、(2)議員報酬の水準（なり手の経済的動機）、(3)直近の競争率（1.0～1.1倍は瀬戸際）。この3つを定点観測すると、次回が選挙戦になるかの見通しが立ちます。

この選挙区の無投票率（0/2回）を全国市議選の無投票率（0.0%）と並べると、なり手不足の相対的な深刻度が読めます。全国平均より高ければ、次回も無投票の可能性を織り込んだ準備（＝選挙戦になった瞬間の相場の不確実性への備え）が要ります。

無投票は挑戦者にとって両義的です。過去に無投票が多い＝『出れば通りやすい』開かれた局面である一方、自分の立候補で初めて選挙戦になれば、相場（当選ライン）が存在せず読みにくくなります。無投票明けの回では、本レポートのレンジ分析と全国比較（08～09章・全国の中での位置）が唯一の相場の手がかりになる——という点を、準備段階で押さえておいてください。

次に検討すべき問い：次回が選挙戦になるか無投票になるかを、(1)現職の年齢構成、(2)議員報酬、(3)直近の競争率の3点から見立ててください。この見立てが『相場が読める選挙』か『相場を作る選挙』かを分け、準備の力点が変わります。

14 選挙区の力学

誰が勝ちやすい構造か——過去回の連続データから

現職の再選率

100.0% n=26

読み方：現職再選率＝前回当選者が出馬した場合に再選した割合。新規参入＝過去回に出ていない候補の当選率。2本のバーの差が大きいほど「地盤の選挙区」、近いほど「開かれた選挙区」です。

全国前例との比較（同種選挙）

全国ベンチマーク未構築（benchmark.py --build 後に反映）。

この選挙区の現職再選率が全国値より高い場合、その差こそが「この土地の固有の力学」です。再選率が高い選挙区での新規参入は、現職の引退・世代交代のタイミングを捉える「空白地狙い」が定石とされ、低い選挙区では現職への挑戦にも合理性が生まれます。

力学の分析は「戦う相手を選ぶ」ためにあります。同じ1議席でも、引退で空く議席と現職が守る議席では、必要な票数も期間も全く異なります。次章以降の世代交代・党派構成のデータと重ねてお読みください。

15 全国前例が示す再挑戦の相場

全国市議選の大規模データが語る、勝ち上がりの確率

全国ベンチマーク（再選率・惜敗者の再挑戦当選率）が未構築のため本章は省略します（benchmark.py --build で反映）。

ベンチマーク構築後は、全国数万件の前例から『惜敗者の何%が次で当選したか』を早見表として示します。

16 世代交代の動き

議席は「空く」のか——当選者の年齢構成から



読み方：当選者の平均年齢の推移です。右肩上がりが続く議会は「同じ顔ぶれの高齢化」が進行しており、数年内にまとまった引退（＝空白議席）が発生する確率が高まります。

直近の当選者平均年齢は**51.6歳**です。平均年齢は比較的若く、現職が長く議席を保持する可能性が高い構成です。世代交代待ちではなく、実力で1議席を取りに行く設計が必要になります。

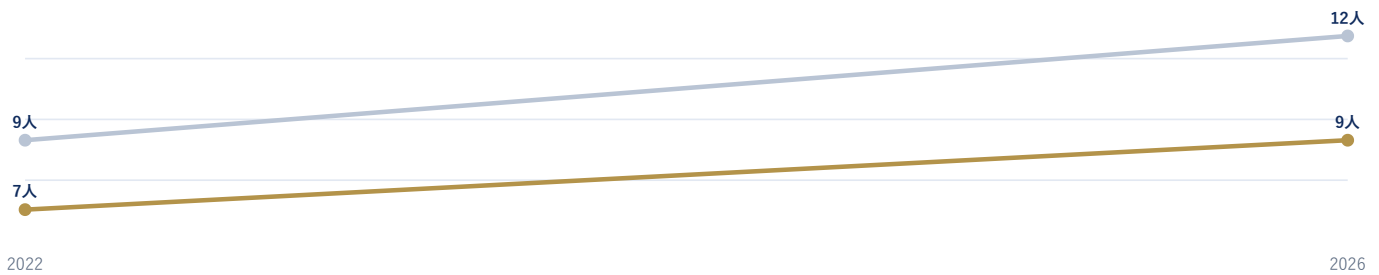
年齢データは公報・届出に基づく公開情報です。個々の引退予想は本レポートの範囲外ですが、「平均年齢×当選回数」の組み合わせは、地元での情報収集の優先順位付けに使えます。

平均年齢の推移幅（51.4歳～51.6歳）は、議会の顔ぶれがどれだけ入れ替わってきたかの間接指標です。ほぼ横ばいなら固定的、上昇し続けているなら「同じ層の高齢化」——後者は近い将来のまとまった引退の予兆として、世代交代待ちの戦略と親和的です。

次に検討すべき問い：直近の当選者平均年齢51.6歳を起点に、現職のうち高齢層が何人いるか（直近回の全候補データの章）を地元情報で確認してください。まとまった引退が近いなら『待つて空席を狙う』、そうでないなら『実力で1議席を取りに行く』——世代交代の局面判断が、参入タイミングを左右します。

17 女性候補・当選の推移

構成のギャップは、それ自体がチャンスになる



読み方：グレー＝女性の立候補者数、金＝女性の当選者数。2本の線の間隔が狭いほど「女性候補が出れば通る」選挙区です。

直近では女性候補12人中9人が当選しました。全国的に女性候補の当選率は男性を上回る傾向が続いており（候補が少ないぶん注目が集まりやすい）、「女性の代表が少ない議会」であること自体が、女性候補にとっての追い風になる構造があります。

有権者の半数は女性です。議会の女性比率と有権者構成のギャップは、それ自体が訴求可能な公共的テーマであり、この選挙区の直近の女性議席数は、その余地の大きさを示しています。

直近の女性当選者数（9人／定数26）を女性有権者比（概ね半数）と対比すると、代表性のギャップの大きさが定量的に見えます。ギャップが大きいほど「多様性」を掲げる訴求の説得力が増し、小さいほど性別以外の差別化軸が要る——という設計判断の材料になります。

女性候補と女性当選者の2本の線の間隔（直近は候補12人・当選9人）は、この選挙区の『女性候補の通りやすさ』を示します。間隔が狭い（出れば通る）なら、女性の立候補そのものが希少で注目を集めやすい構造であり、間隔が広いなら擁立はあっても当選までは競争がある、と読めます。いずれにせよ、議会の女性比率と有権者構成のギャップは中立的かつ公共的な訴求テーマとして機能します。

18 党派構成の推移

議席の「色」はどう変わってきたか



読み方：各回の当選者を党派別に積み上げた図です。地方選では無所属が最大勢力になるのが通例で、無所属の塊の大きさは「政党の看板より個人の地縁・実績で決まる選挙区」であることを意味します。

政党公認・推薦の効果はこの図で読めます。特定政党の議席が安定して確保され続けている場合、その党には固定的な組織票が存在し、公認・推薦の獲得が票数に直結します。逆に議席が不安定な党派の看板は、選挙区内では追い風にも向かい風にもなり得ます。

巻末近くの「政党の地力」章（国政選挙の比例得票）と重ねると、『国政では票があるのに地方議席がない政党』＝組織票の受け皿が空いている領域、が見えることがあります。これは公認・推薦の交渉材料になり得る分析です。

収録2回で議席に現れた党派は4系統です。この系統数が少ないほど固定的な党派構造、多いほど回ごとの新規参入で色が入れ替わる流動的な議会を示します。

無所属の塊が一貫して最大なら、この選挙区は「政党より個人」で票が動くという性格が確定的です。

次に検討すべき問い：この選挙区で公認・推薦が票に結びつくかは、特定党派の議席が安定して確保され続けているかで見立てられます。巻末の『政党の地力』章（国政比例得票）と重ね、『国政では地力があるのに地方議席が薄い党派』があれば、その党の推薦は組織票の受け皿として交渉価値がある——という仮説を立てられます。

19 各回スナップショット

当選者の顔ぶれ——年齢・女性・新人の回別まとめ

年	定数	平均年齢	女性当選	新人当選
2022	26	51.4歳	7人	6人
2026	26	51.6歳	9人	6人

読み方：各回の当選者を『平均年齢・女性の当選者数・新人の当選者数』の3属性で横断した要約表です。平均年齢が上昇し続けていれば世代交代の圧力、新人当選が続いていれば開放度の高さを示します。

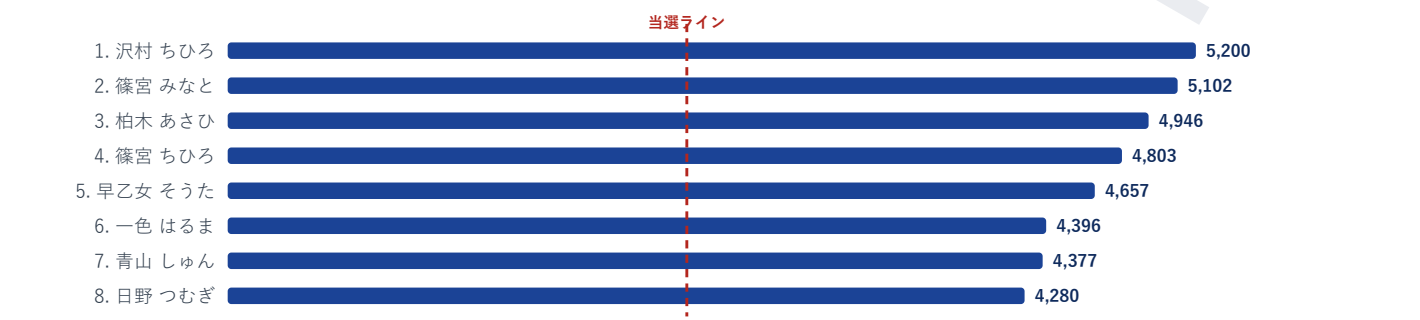
収録2回の通算で、新人当選は延べ12人、女性当選は延べ16人でした。新人当選が定期的に出ている選挙区は『新しい顔』に開かれており、初挑戦の勝算が相対的に高い構造です。逆に新人当選がほとんど無い回が続くなら、現職の壁が厚く、世代交代のタイミングを待つ設計が有効になります。

この3属性は、12章（世代交代）・13章（女性候補）・11章（力学）の結論を1枚に凝縮したものです。属性の推移を追うことで、『この議会が今どの局面にあるか——高齢化の進行期か、入れ替わり期か』が読め、新規参入の狙い目（待つべきか、今挑むべきか）の判断材料になります。

20 2022年の詳細レビュー

投票率55.1%・定数26・立候補32人・当選ライン2,466票

得票上位8人



当落のボーダー（この回の最後の攻防）

候補者	党派	得票	結果
野々村 かえで	無所属	2,538	当選
時任 ひなの	無所属	2,466	当選
綾瀬 りく	日本共産党	2,315	落選
早乙女 ひなの	無所属	2,313	落選

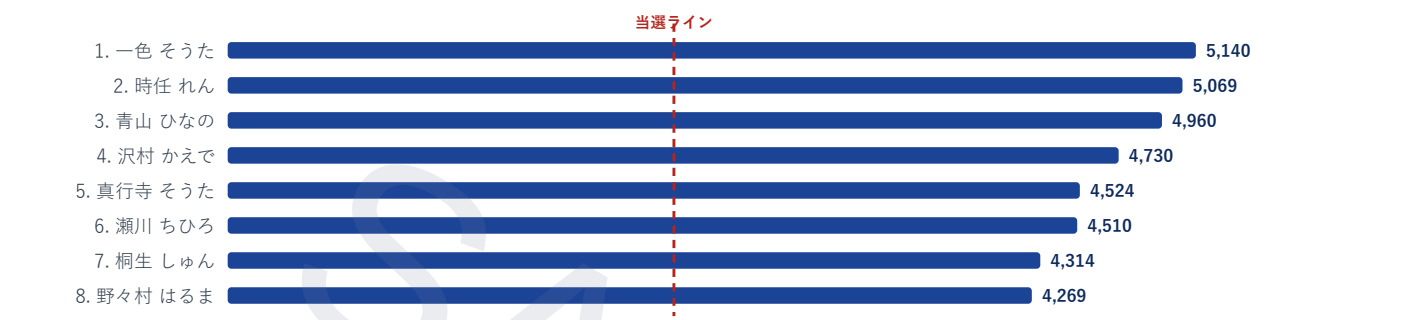
この回の当落を分けた差は**151票**でした。

2022年は競争率1.23倍・投票率55.1%という条件下で、当選ライン2,466票・トップ5,200票という結果になりました。トップと当選ラインの比は2.11倍で、上位に票が集中した回です。

21 2026年の詳細レビュー

投票率52.3%・定数26・立候補32人・当選ライン2,369票

得票上位8人



当落のボーダー（この回の最後の攻防）

候補者	党派	得票	結果
真行寺 かえで	公明党	2,444	当選
汐見 あさひ	自由民主党	2,369	当選
桐生 ことは	公明党	2,353	落選
早乙女 しゅん	無所属	2,283	落選

この回の当落を分けた差は**16票**でした。

2026年は競争率1.23倍・投票率52.3%という条件下で、当選ライン2,369票・トップ5,140票という結果になりました。トップと当選ラインの比は2.17倍で、上位に票が集中した回です。

22 直近回の全候補データ

2026年・全32候補の完全な結果

順位	候補者	党派	新旧	年齢	得票	結果
1	一色 そうた	日本共産党	現職	32	5,140	当選
2	時任 れん	無所属	現職	66	5,069	当選
3	青山 ひなの	無所属	現職	58	4,960	当選
4	沢村 かえで	自由民主党	現職	48	4,730	当選
5	真行寺 そうた	日本共産党	現職	50	4,524	当選
6	瀬川 ちひろ	日本共産党	現職	49	4,510	当選
7	桐生 しゅん	無所属	現職	61	4,314	当選

順位	候補者	党派	新旧	年齢	得票	結果
8	野々村 はるま	無所属	現職	54	4,269	当選
9	篠宮 はるま	無所属	現職	32	4,028	当選
10	青山 つむぎ	公明党	現職	71	3,940	当選
11	瀬川 あさひ	公明党	現職	62	3,856	当選
12	柏木 さくや	日本共産党	現職	74	3,680	当選
13	早乙女 れん	無所属	現職	64	3,538	当選
14	龍造寺 ちひろ	自由民主党	現職	46	3,462	当選
15	久遠 いつき	無所属	現職	65	3,395	当選
16	綾瀬 みなと	無所属	現職	33	3,228	当選
17	篠宮 りく	無所属	現職	45	3,216	当選
18	日野 ゆずき	無所属	現職	74	3,020	当選
19	沢村 ゆずき	公明党	現職	55	2,997	当選
20	柏木 つむぎ	公明党	現職	33	2,848	当選
21	汐見 ことは	日本共産党	新人	31	2,828	当選
22	日野 ひなの	無所属	新人	73	2,804	当選
23	久遠 なぎ	無所属	新人	52	2,648	当選
24	綾瀬 さくや	無所属	新人	33	2,625	当選
25	真行寺 かえで	公明党	新人	45	2,444	当選
26	汐見 あさひ	自由民主党	新人	35	2,369	当選
27	桐生 ことは	公明党	新人	69	2,353	落選
28	早乙女 しゅん	無所属	新人	50	2,283	落選
29	時任 みなと	日本共産党	新人	45	2,214	落選
30	野々村 なぎ	日本共産党	新人	52	2,132	落選
31	一色 りく	自由民主党	新人	40	2,093	落選
32	龍造寺 いつき	無所属	新人	67	2,058	落選

この表は次回の「出発点の名簿」です。現職（次回は当選実績を持つ競合）、惜敗者（次回に再挑戦し得る競合）、引退可能性のある高齢議員——それぞれの動向が、次回のあなたの必要票数を決めます。

特に当落ボーダー付近の惜敗者と、高齢の現職の去就は、次回の相場を動かす2大変数です。この名簿を起点に、誰が次回も残り・誰が退くかを地元情報で埋めていくのが、競合分析の第一歩になります。

直近回は定数26に対し32人が立候補し、当選ライン2,369票で当落が分かれました。

この名簿の『新旧』列（現職・元職・新人）は、次回の顔ぶれを予測する最重要の手がかりです。現職の多くが残れば相場は安定、引退が相次げば当選ラインは下振れしやすい——という読みの起点になります。

23 直近回の統計分析

票の散らばり方から見る、参入のしやすさ



直近回の得票分布は、中央値3,222票・四分位2,534～4,148票でした。新規参入の初回目標として現実的なのは「まず中央値」です。中央値に届けば全候補の半分より上に立ち、ボーダーゾーンでの勝負権が生まれます。

上位3人への集中度が14%と低めで、票が広く行き渡る「分散型」です。小さな積み増しが順位に直結しやすく、新規参入に比較的やさしい構造です。

四分位範囲（Q1～Q3＝2,534～4,148票）は、上下25%の外れ値を除いた「中間の50%」の幅です。この幅が狭ければ横並びの混戦（わずかな差で順位が動く）、広ければ実力差が明確——という選挙の性格を示します。新規参入者は、まずこの中間帯に入ることが最初のマイルストーンに置くのが現実的です。

平均得票（3,362票）と中央値（3,222票）を見比べることも有益です。平均が中央値より大きく上振れしていれば、少数の大量得票候補が分布を引き上げている（＝上位集中型）ことを意味し、両者が近ければ票が均等に散った分散型です。この2つの代表値の差は、上位候補への集中度をもう一つの角度から示します。

次に検討すべき問い：まずは中央値3,222票を最初の到達目標に置き、そこに届く現実的な支持の積み上げ方を設計してください。中央値超えは『全候補の半分より上』を意味し、ボーダー圏での勝負権を得る最低条件になります。

24 勝ちパターンの分解

『どこを狙うか』で必要な戦い方が変わる——3つの水準

狙う水準	目安票数	求められる戦い方
中央値に届く	3,222票	全候補の半分より上へ。まずここでボーダー圏の勝負権を得る
当選ライン中央値	2,417票	過去の半分の回で当選圏。標準目標として設計する水準
確実圏	2,466票	どの回でも当選圏。構造変動にも耐える上積みが要る

読み方：直近回の得票中央値と、当選ラインのレンジ（中央値・確実圏）を1枚に重ねた早見です。『まず中央値、次に標準目標、最後に確実圏』という段階目標として使えます。

この選挙区では、直近の得票中央値が3,222票、当選ラインの中央値が2,417票、確実圏が2,466票でした。中央値と当選ラインの差（805票）が、『分布の真ん中』から『合格点』までの距離です。この差が小さいほど中位からの逆転が起こりやすく、大きいほど当選には明確な上積みが要る選挙区、と読めます。

勝ちパターンを1つに決めつけず、3水準の段階目標として持つ利点は、途中経過を評価できることにあります。まず中央値を越えたか、次に標準目標に届いたか——と段階で進捗を測れば、活動が効いているかを投票日を待たずに判断でき、資源配分の軌道修正が早くなります。

次に検討すべき問い：あなた（または想定する候補）の現在の確実な支持は、この3水準（3,222／2,417／2,466票）のどこにあるか。その現在地から次の水準までの差が、当面『調達すべき票』になります。

25 全国の中でのこの選挙区

全国市議選データの分布の中での位置づけ

投票率の全国位置

上位50%

全国の市議選 2件の中で

当選ライン水準の全国位置

上位50%

全国の市議選 2件の中で

当選ラインの全国位置が上位に行くほど「1議席の値段が高い」選挙区です。他の自治体での選挙経験・相場観をこの選挙区に持ち込む場合は、この位置の差だけ補正が必要になります。

投票率の全国位置は、有権者の政治関心の相対水準です。関心が高い選挙区では政策発信・討論会などの「空中戦」の効果が相対的に大きく、資源配分の参考になります。

これらの位置づけは毎回の選挙で動きます。受注版の納品時点で最新データに再計算のうえお届けします。

26 地域データ①：財政の条件

政策論争の土台になる自治体財政

SAMPLE サンプル値（受注時に実データへ差し替え）

財政力指数	0.62	1に近いほど自主財源が豊か。類似団体平均は0.55前後
経常収支比率	91.4%	90%超は財政の硬直化が進んでいる水準
実質公債費比率	8.7%	18%未満は健全域。起債に許可が不要な水準
地方債残高（住民1人あたり）	41.2万円	将来世代への負担の指標
基金残高（住民1人あたり）	12.8万円	財政の「貯金」。災害・不況への備え

財政指標は「何を公約できるか」の物理的な制約条件です。財政力指数が低く経常収支比率が高い自治体では、新規事業の公約より「何を守り、何をやめるか」の優先順位の提示が誠実であり、有権者にも見抜かれにくい虚飾を避けられます。

特に経常収支比率（財政の硬直度）は、議会での予算議論の自由度を決めます。90%を超える水準では、新規施策の財源はほぼ「既存事業の見直し」からしか出てきません。この構造を語れる候補は政策議論で信頼を得やすくなります。

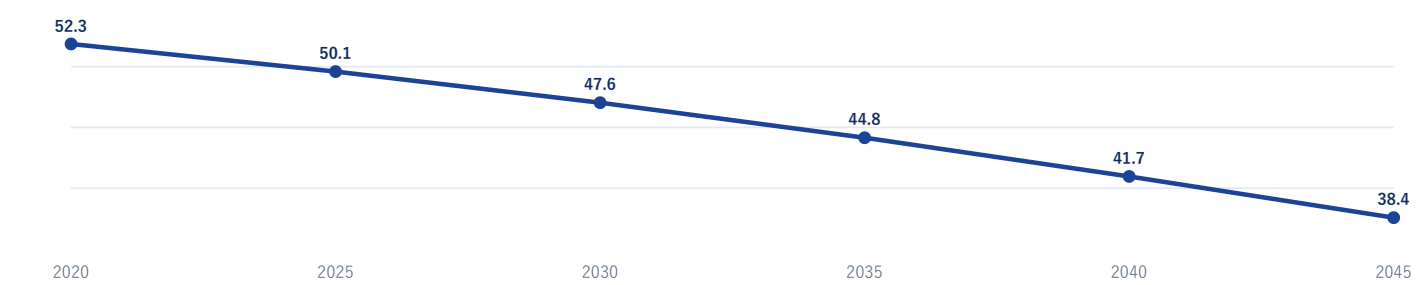
正式納品版では、総務省「地方財政状況調査」の最新値を反映し、類似規模団体との比較列を追加します。

財政の章を選挙の相場（当選ラインのレンジ）と結びつけると、政策論争の現実的な射程が見えてきます。限られた財源の中で『何を優先するか』を数字で語れる候補は、抽象的な理念だけの候補より、特に投票率の高い（＝関心の高い）層に対して説得力を持ちます。財政の制約は弱点ではなく、誠実さを示す論点として使えるのがこの章の含意です。

27 地域データ②：人口の将来

有権者の母数はどこへ向かうか

SAMPLE サンプル値（受注時に実データへ差し替え）



読み方：国立社会保障・人口問題研究所の将来推計（サンプル表示）。有権者の母数そのものの長期トレンドです。

人口減少は、当選ラインを長期的に押し下げる一方、「地域の縮小への向き合い方」という最大の争点を生みます。学校統廃合・公共施設の維持・交通の再設計——これらはすべて人口推計から派生する政策テーマであり、数字を踏まえた議論ができる候補とそうでない候補の差が最も出る領域です。

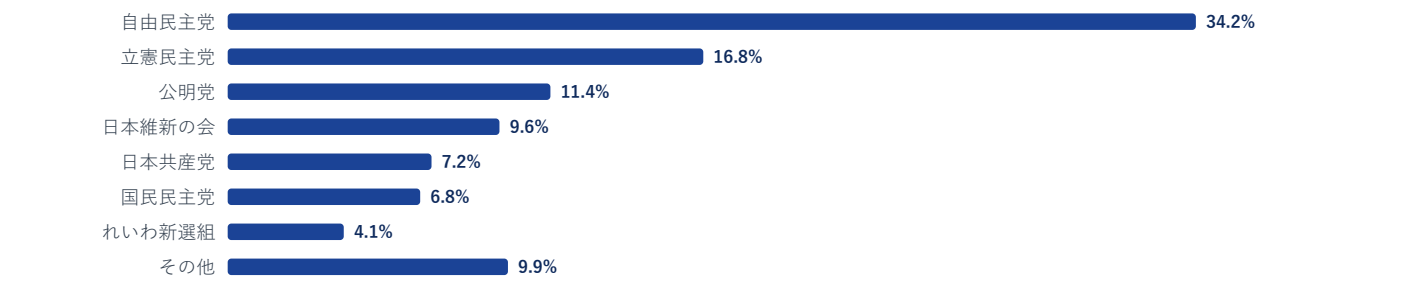
また高齢化率の上昇は投票者の年齢構成を変えます。人口が減っても高齢有権者の実数は当面維持されるため、「誰が投票所に来るか」は人口総数より緩やかにしか変わりません。年代別投票率の章と併せてお読みください。

長期の人口トレンドは、当選ラインの将来方向を考える最も緩やかな背景変数です。有権者の母数が縮めば、他の条件が同じなら合格点（当選ライン）は数年～十数年かけて下がっていきます。ただしその効果は投票率や候補者数の年ごとの変動よりずっと遅いため、次の目標設定はあくまで過去実測のレンジ（08章）を主、人口トレンドを従として組み立ててください。

28 政党の地力

国政選挙（比例代表）でのこの地域の政党別得票率

SAMPLE サンプル値（受注時に実データへ差し替え）



読み方：国政比例の得票は「純粋な政党支持」の分布に最も近いデータです。地方選の無所属文化の下に眠っている「土地の政治的な地質」を示します。

この分布の使い道は2つあります。第一に、公認・推薦を検討する際の期待値計算——地力の大きい政党の推薦は組織票に、小さい政党の公認は逆に無党派層への忌避に働き得ます。第二に、政策訴求のトーン設計——保守的な地質の選挙区で急進的な訴えは届きにくく、その逆もまた然りです。

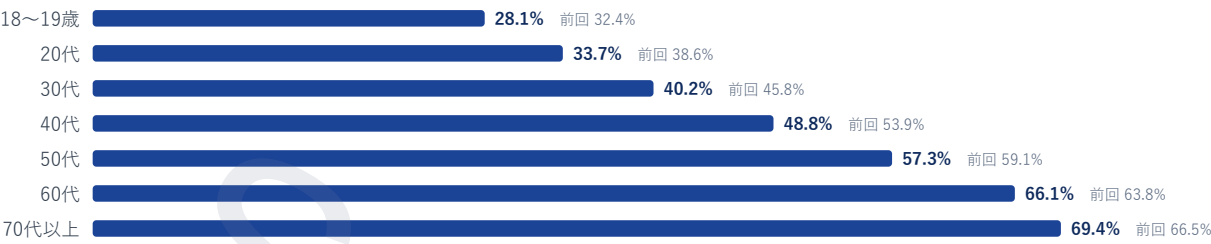
14章（党派構成の推移）と重ねると、「国政では票があるのに地方議席の無い政党」＝空白の受け皿が見えます。正式納品版では、直近の国政選挙の市区町村別確定得票を反映します。

この「地力」は国政比例＝政党名で投じられた票の分布であり、地方選（無所属が主役の市議選）とは直接には結びつきません。だからこそ両者のギャップに情報価値があります。国政で厚い支持を持つ政党が地方議席を取り切れていない領域は、組織票の受け皿が空いている可能性を示し、公認・推薦交渉や訴求トーンの設計を考える出発点になります。

29 年代別投票率

どの世代が投票所に来る選挙区か

SAMPLE 受注時に選管公表値を取得して差し替え



読み方：年代が上がるほど投票率が高い「右肩上がり」が全国標準の形です。60代以上の投票率が70%前後に達する一方、20～30代は30～40%台にとどまるのが典型で、実際に投票する人の年齢構成は人口構成より大きく高齢に偏ります。

この構造の実務的な意味は「確実に来る層への浸透が票の土台、来ない層の掘り起こしが上積み」という二層構造です。土台なしに上積みだけを狙う選挙（若年層特化など）は、投票率が跳ねない限り構造的に不利です。

一方で、争点のある選挙・同日選挙では若年層の投票率が5～10pt跳ねることがあり、その場合は従来の当選ラインの相場が崩れます。レンジ分析（08～09章）の「最大値シナリオ」は、この局面への備えでもあります。

SAMPLE章の読み方：この表は全国標準の年代別投票率パターン（SAMPLE）です。受注版ではこの選挙区の選管公表値に差し替えますが、直近の全体投票率（52.3%）を年代別に按分して読むだけでも、『土台となる高投票率層』と『上積み余地のある低投票率層』のあたりはつきます。

30 有権者の関心が高い争点

この地域で「語るべきテーマ」の優先順位

SAMPLE 受注時に人間による調査・検証を経て作成（第3層・保存版の地域知）

位	争点と背景	関心度
1	物価高・生活支援対策 生活防衛・所得向上に向けた具体策への期待	56.3%
2	年金・医療・福祉の充実 地域医療体制の強化、負担軽減への関心が高い	43.8%
3	子育て・教育環境の充実 保育・教育環境の充実、経済的支援の拡充	35.7%
4	景気対策・経済成長 地元経済・商店街の活性化、雇用の維持	32.6%
5	政治の信頼回復・透明性 情報公開・住民との対話姿勢が問われる	28.1%

争点データの価値は「順位」そのものより、上位争点とあなたの経歴・実績の接点を見つけることにあります。関心度1位のテーマでも、語る資格（実績・専門性）のない候補の訴えは響きません。自分の強みと重なる争点に賭けるのが、限られた発信資源の最適配分です。

正式納品版では、地域報道・議会議事録・公開調査を横断して争点を洗い出し、人間の検証を経て、出典と時点を明記した形でこの表を作成します（複数回答・n付き）。機械生成の「それっぽい地域記述」は販売物には載せない、というのが本レポートの品質方針です。

SAMPLE章の読み方：受注版でこの選挙区の実争点に差し替える前提の枠です。差し替え後は、上位争点のうち『自分の経歴・実績と接点があるもの』を2〜3に絞り込み、そこに発信資源を集中させる——この優先順位づけが、限られた時間で最も効く使い方になります。

31 重点アプローチ層の整理

誰に・何を・どう届けるかの設計図（フレームのサンプル）

SAMPLE フレーム例。受注時にこの選挙区の実データ（年代構成・投票率）で作成

層	特性・傾向	有権者比	アプローチの方向性
無党派・浮動層（中間層）	政策・人柄・実績を重視。情報収集はオンライン中心	27.4%	信頼醸成・共感設計のメッセージを継続接触で
現役子育て世代（30〜40代）	子育て・教育・将来不安に関心。SNS接触が主	18.6%	SNS・デジタル広告で課題解決型の訴求を
シニア層（65歳以上）	投票率が高く、組織・口コミの影響が大きい	30.2%	対面・電話・地域活動で信頼と共感を強化

層別アプローチの本質は「全員に好かれようとしない」ことです。有権者を投票行動の性質で3〜4層に分け、それぞれへの接触手段と頻度を決めて初めて、日々の活動が計画になります。この表はそのための標準フレームで、比率・特性は受注時にこの選挙区の実データで置き換えます。

注意点として、どの層への訴求も公職選挙法の規制（文書図画・戸別訪問の禁止等）の中で行う必要があります。具体的な手段の適法性は、必ず専門家にご確認ください。本レポートは「誰に届けるか」の分析までを提供します。

SAMPLE章の読み方：この3層フレームは全国標準の型です。受注版ではこの選挙区の年代構成・年代別投票率（年代別投票率の章）で各層の比率を実データ化します。差し替え後は、各層に対する接触手段と頻度を1枚に決めることで、日々の活動が『誰に・何回会うか』という計画に変わります。

32 選挙準備の標準タイムライン

逆算のための一般的な工程表（中立的な一般知識）

時期	フェーズ	主な内容
12〜18ヶ月前	意思決定と土台づくり	出馬意思の確定・家族と職場の合意・資金計画。本レポートの目標票数を基準に、必要な支援規模を逆算
9〜12ヶ月前	体制の骨格	後援会の核となるメンバーの確保・政治団体の届出・事務所機能の設計

時期	フェーズ	主な内容
6～9ヶ月前	面の拡大	地域行事・団体まわりの本格化・発信基盤（SNS/通信）の定常運用・名前の浸透度の中間測定
3～6ヶ月前	政策の確定	公約の最終化（争点章と財政章の突き合わせ）・討論会/公開の場への露出・推薦手続き
～3ヶ月前	実戦準備	選挙事務所・法定書類・ポスター/ビラの準備（法定規格）・出陣の体制表
告示～投票日	選挙運動期間	法定の選挙運動。ここで新しい支持は増やしていく、それまでの蓄積を「投票行動」に変換する期間

最重要の含意は最終行にあります。**告示後に新しい支持はほぼ増えません**。選挙運動期間は「積み上げた認知と信頼を、投票という行動に変換する」期間であり、勝負は告示の6ヶ月以上前についているのが実態です。本レポートの分析が「今すぐ」役に立つのはこのためです。

各工程の法的な要件（政治団体の届出・寄附の規制・文書図画の規格）は自治体・選挙種別で細部が異なります。工程表はあくまで一般形として使い、法務の確認は選挙管理委員会・行政書士に個別に行ってください。

33 目標票数ワークシート

レンジ分析を「日々の活動量」に翻訳する

シナリオ	目標票数	1日あたり接点(300日)	備考
最低ライン（賭け）	2,369票	26人	好条件の再現頼み。推奨しない
標準目標	2,417票	27人	過去の半分の回で当選圏
確実圏	2,466票	27人	全回で当選圏。構造変動にも耐える

読み方：「1日あたり接点」は、投票日まで300日・接点→投票の転換率30%という仮置きでの機械計算です。自陣営の実測転換率が分か
り次第、この列を差し替えて運用してください。

ワークシートの使い方：(1)標準目標を陣営の公式目標として共有する。(2)現時点の確実な支持（後援会名簿等）を数え、目標との差＝「調達すべき票」を確定する。(3)差を、維持・紹介・新規開拓の3経路に配分し、月次の活動量に落とす。――この3ステップで、感覚の選挙が計画の選挙に変わります。

差が大きすぎる場合の選択肢は「期間を延ばす（次々回を本命にする）」「体制を拡大する」「土俵を変える」の3つです。どれを選ぶにせよ、数字で判断した記録を残すことが、後悔しない意思決定の条件です。

34 行動枠：目標を月次に落とす

ワークシートの数字を、無理なく続く活動量へ

区分	目安	根拠・考え方
標準目標	2,417票	過去の半分の回で当選圏（当選ライン中央値）
必要な新規接点	約8,057人	転換率30%の仮置きで目標票数から逆算
1日あたり	約27人	投票日まで300日で割った機械計算
1ヶ月あたり	約806人	1日目安×30日。月次の管理単位に

読み方：目標票数を『毎月・毎日どれだけの新規接点が必要か』へ機械的に分解した早見です。転換率30%・300日は仮置きで、自陣営の実測が出たら差し替えて精度を上げます。

標準目標2,417票を達成するには、転換率30%の仮定で約8,057人との新規接点が必要になります。これを投票日まで300日で割ると1日約27人、月あたり約806人——この『月次の数字』こそが、活動が計画として回るかどうかの分岐点です。数字が現実離れしているなら、期間を延ばすか体制を広げるかを、感覚ではなく数字で判断できます。

重要なのは、この数字を『既存の確実な支持』と対で管理することです。後援会名簿など今すでに数えられる票を引いた『調達すべき票』だけが、新規接点の対象になります。ゼロから全票を積む前提で計算すると過大になりがちなので、必ず現在地（確実な支持数）を先に確定してから、この行動枠を差し引きで運用してください。

この枠の使い方：月次の新規接点目標をカレンダーに落とし、月末に実績と照合する——この1サイクルを回すだけで、『なんとなく忙しい』選挙が『進捗の見える』選挙に変わります。数字は毎月見直し、転換率は実測で更新してください。

35 章別サマリー

各章の結論値を1行ずつ——本文への索引として

章／指標	この選挙区の結論値
過去の選挙結果	収録2回・うち選挙戦2回
投票率の推移	直近 52.3%／全国中央値 —
当選ライン	2,369～2,466票（中央値 2,417票）
競争率	1.23～1.23倍
無投票	収録2回中 0回
選挙区の力学	現職再選率 100%
当選ラインの全国位置	上位50%

読み方：本文の主要章の結論値を1行ずつ抜き出した索引です。気になる指標の行から、本文の該当章に戻って背景（なぜその水準か・次に何を問うべきか）を確認する、という読み方の入口として使えます。

この一覧は、本レポートを『何度も参照する保存版』として使うための索引です。選挙準備は数ヶ月～数年に及び、その間に何度もこのレポートに立ち返ることになります。毎回全文を読み返す必要はなく、この1ページで全体像を思い出し、必要な章だけを開く——という運用を想定しています。

値はすべて本文の該当章から機械的に転記したもので、新たな推測は含みません。『—』や『データ不足』の行は、この選挙区の収録データでは算出条件を満たさなかった指標で、受注版で外部データや追加回を反映した際に埋まります。

36 この選挙区・早わかりQ&A

よくある問いに、本文の数字で短く答える

何票あれば勝てる？	標準目標は当選ライン中央値の 2,417票 、備えとして確実圏 2,466票 を視野に置きます（08章）。
票を動かす要因は？	投票率と候補者数です。投票率±3ptで数百票が出入りし、候補者数の増減が票の分散を変えます（05・07・09章）。
議席は空きやすい？	現職再選率100%という数字が目安です。高めで、現職の壁を崩すより引退・世代交代のタイミングを捉える設計が有効です（11・12章）。
いつ動き出すべき？	告示の6ヶ月以上前。選挙運動期間に新しい支持はほぼ増えません（選挙準備タイムラインの章）。

このQ&Aは、本レポートで最も問い合わせの多い4点を、本文の該当章の数字で短く答えたものです。いずれも推測ではなく、この選挙区の過去実測と全国比較から機械的に導いた回答で、詳しい根拠は各回答末尾に示した章でご確認いただけます。

有料資料としての本レポートの価値は、これらの問いに『感覚』ではなく『数字』で答えられる状態を作ることにあります。陣営内で意見が割れたときに立ち返る共通の事実——それがこのQ&Aと、次ページの総括ダッシュボードの役割です。

使い方：この1ページを、支援者への説明の『つかみ』としてお使いください。4つの問いへの短い答えで全体像を共有し、関心を持たれた論点だけ本文の該当章に案内する——という流れが、限られた説明時間で最も効率的です。

37 相場の総括ダッシュボード

この選挙区の「相場」を1画面に——巻末の早見表

標準目標（当選ライン中央値） 2,417票 確実圏 2,466票	投票率（直近／全国中央値） 52.3% 全国 —	現職再選率 100% n=26
当選ラインのレンジ	2,369～2,466票（中央値 2,417票）	
競争率のレンジ	1.23～1.23倍（中央値 1.23倍）	
投票率のレンジ	52.3～55.1%（中央値 53.7%）	
無投票の頻度	収録2回中 0回	
当選ラインの全国位置	上位50%	
投票率の全国位置	上位50%	

この早見表は、本文各章の結論値を1画面に集約したものです。日々の意思決定でいちいち本文に戻らずとも、『目標は中央値、備えは確実圏、分母は投票率±3pt』という3点をここで即座に確認できます。陣営内で1枚だけ共有するなら、このページを推奨します。

数字はいずれも本文の該当章から機械的に転記したもので、新たな推測は含みません。各値の背景（なぜその水準なのか・次に何を問うべきか）は、対応する本文章と巻末の確認論点で確認してください。早見表は入口であって、結論ではありません。

ダッシュボードの使い方：まず標準目標（2,417票）を陣営の公式目標として固定し、投票率と競争率のレンジを『上振れ・下振れ』の幅として添える——この3点セットが、日々の活動量を定める基準になります。

38

次の一手につながる確認論点

データから立てるべき「問い」——優先度つき

優先度	論点
最優先	目標票数の陣営内合意——標準目標と確実圏の2段構え（ワークシート章）
最優先	次回選挙の想定時期・定数改定・区割り変更の公式確認
高	現職の年齢構成・引退観測の情報収集（世代交代章の数字を地元情報で補正）
高	無投票明けリスクの評価——新規参入が何人いると相場がどう動くか（レンジ章）
中	公認・推薦の期待値計算（政党の地力章×党派構成推移章）
中	年代別投票率の実データ取得（選管公表状況の確認）→SAMPLE章の差し替え
中	同日選挙の有無の確認——投票率シナリオの前提
低	投票区別開票データの公表状況確認——地区別分析（上位プラン）の可否

本レポートは「答え」ではなく「精度の高い問い」を提供するものです。上の論点はいずれも、本文の該当章の数字を根拠として持っています。陣営の検討会議のアジェンダとしてそのままお使いください。

最初の30日でやるべきは上2つ（目標の合意と公式日程の確認）だけです。この2つが決まらないまま活動量を増やすのは、目的地なしに走り出すことと同じです。

39

用語解説

本レポートで使用した指標の定義

用語	定義
当選ライン	その選挙で最後に当選した候補（定数と同じ順位）の得票数。当選に必要なだった票数の実測値。
競争率	立候補者数 ÷ 定数。1.0倍以下は無投票。高いほど票が分散し、当落の予測が難しくなる。
レンジ分析	過去の実測値の最小～最大の幅。将来を点で予想する代わりに「起こり得る幅」で捉える本レポートの基本姿勢。
現職再選率	前回当選者が今回も出馬した場合に当選した割合。選挙区の「地盤の強さ」の指標。
新規参入の当選率	その選挙区の過去回に出ていない候補が当選した割合。「新しい顔」への開放度。
無投票	立候補者数が定数以下で、投票が行われず全員当選となること。なり手不足の指標。
財政力指数	自治体の自主財源の豊かさ。1.0で交付税に頼らず運営できる水準。
按分票	同姓・同名の候補がいる場合に、氏名の一部だけ書かれた票を得票割合で配分する制度。

本レポートの指標はすべて上記の定義で機械的に計算しています。報道・他資料と数値が異なる場合は、定義の違いかデータ時点の違いが原因である可能性が高いです。

用語の定義を共有することは、陣営内の議論を噛み合わせる第一歩です。『当選ライン』『到達率』『レンジ』を全員が同じ意味で使えるようになって初めて、目標も進捗も共通の物差しで語れます。この一覧は、後援会・支援者への説明資料の巻末にそのまま添付できる形で用意しています。

40 データの限界と正しい使い方

本レポートで『できること』と『できないこと』の境界

本レポートが扱う範囲

できること	過去実測の相場（当選ライン・競争率・投票率のレンジ）の提示と、全国分布の中での相対位置の算出。
できないこと	特定候補の当落予想、個々の議員の引退予測、選挙運動の具体的手段の適法性判断（専門家の領域）。
保留すること	SAMPLE表記の章（争点・年代別投票率・重点層・未配置の外部データ）。受注時に実データへ差し替え。

本レポートの数値の信頼性は、収録した過去2回・全候補データの完全性に依存します。スクレイピング元の公表値に誤りや欠損があれば、それは本レポートの数値にも波及します。報道や選管公表と食い違う箇所があれば、まず定義の違い（用語解説参照）とデータ時点を疑い、重要な意思決定の前には一次資料（選管発表）で必ず裏取りしてください。

また、過去2回の相場は『次回も同じ構造が続く』ことを保証しません。定数改定・区割り変更・同日選挙の有無・突発的な争点は、過去の相場を無効化し得ます。だからこそ本レポートは点予想を避け、レンジ（幅）と全国比較という『構造が多少変わっても意味を持つ』形で情報を提供しています。

正しい使い方は、本レポートの数字を『唯一の答え』ではなく『地元の生情報と突き合わせる叩き台』とすることです。数字と現場の実感が食い違う点こそが、この選挙区の『データに出ない何か』の在り処であり、最も深掘りする価値のある論点になります。データは意思決定を代替せず、より良い出発点を与えるものです。

特に注意したいのは、平均や中央値といった代表値が『個々の候補』を語らない点です。本レポートは選挙区の『構造』を記述するものであり、特定の人物の強さ・弱さを断じるものではありません。個々の候補の評価は、本レポートの構造データを背景に置いたうえで、地元での一次情報と本人の実績で行うべき領域です。

最後にSAMPLE章の扱いについて改めて明記します。争点・年代別投票率・重点アプローチ層・未配置の外部データは、全国標準の型（SAMPLE）で枠だけを示しています。これらを『この選挙区の実データ』と誤読しないよう、各章にSAMPLEバッジを付しています。受注版では人間の検証を経て実データへ差し替え、出典と時点を明記します。

最後に：当落予想を求める場合や、公職選挙法に関わる具体的手段の可否は、行政書士・選挙管理委員会など専門家にご相談ください。本レポートは、その相談をより実りあるものにするための事実整理として設計されています。

41 まとめ

この選挙区と向き合うための最終確認

みなと市議会議員選挙は、当選ライン2,369～2,466票・現職再選率100.0%という「相場」を持つ戦場です。相場を知らずに戦うことと、知って戦うことの差は、資源の少ない挑戦者ほど大きく出ます。

本レポートの数字は、あなたの現場の実感と食い違う箇所があるはずです。その食い違いこそが、この選挙区の「数字に出ない何か」の在り処であり、最も深掘りする価値のある論点です。数字と実感の突き合わせの叩き台として、本レポートを使い倒してください。

最後に、本レポートで一貫して強調してきた3点を再掲します。第一に、目標は当選ライン中央値2,417票を第一目標・確実圏2,466票を備えとして、票数の絶対値ではなく当選ラインとの距離で管理すること。第二に、投票率と競争率のレンジを上振れ・下振れの幅として常に添えること。第三に、告示の半年以上前から動くこと——選挙運動期間に新しい支持はほぼ増えないからです。

この選挙区の相場を知ったうえで、次に必要なのは『問い』を立てることです。巻末の確認論点を陣営の検討アジェンダとして使い、本レポートの数字と地元の生の情報を突き合わせてください。

データは意思決定を代替しませんが、勘だけの意思決定より確実に良い出発点を与えます。

本レポートは一度読んで終わりではなく、選挙準備の各段階で繰り返し参照する保存版として設計しました。意思決定に迷ったときは総括ダッシュボードと章別サマリーで全体像を思い出し、必要な章だけを開いてください。そして受注版では、SAMPLE表記の章を実データへ差し替え、外部データ（財政・人口・国政得票）を反映して正式納品します。本レポートの土台の上に、この選挙区固有の一次情報を積み重ねていくのが理想的な使い方です。

結び：相場を知らずに戦うことと、知って戦うことの差は、資源の少ない挑戦者ほど大きく出ます。本レポートが、その差を埋める確かな一歩になれば幸いです。次の一手は、巻末の確認論点の上2つから始めてください。

本レポートに掲載した数値は作成日時点の収録データに基づきます。選挙結果は公表情報の更新で変わり得るため、重要な判断の前には各選挙管理委員会の最新発表で必ず裏取りをしてください。以下の免責事項も併せてご確認ください。

注記・免責事項

本レポートの分析は、公開されている選挙結果および独自集計に基づくものであり、将来の選挙結果を保証するものではありません。数値は公表情報の更新により変更される可能性があります。正式な記録は各選挙管理委員会の発表をご確認ください。

本資料は依頼者本人（または正当な権限を有する陣営関係者）の利用に限定した機密資料です。無断転載・複製・第三者への配布を禁じます。SAMPLE表記のある章は、受注時に実データへ差し替えのうえ正式納品します。

— 確かなデータが、次の勝利を照らす —

選挙情報局

選挙区攻略ブリーフィング／作成日 2026年07月06日